

# 近世社会と離婚女性

——在方無高百姓養女の場合——

渡邊 忠 司

〔抄 録〕

身分制に制約された近世社会で、享和二年（一八〇二）の記録に、離婚女性が子供を育てながら、歛仕事・糸仕事・按摩などで家族を支えていた事例がある。女性は無高百姓の養女で歳は二四、五才、子供（女）は三才であった。離婚女性の、それも無高百姓の養女の生活や稼ぎの実態についての研究はあまり多くない。近

世社会の身分制と家制度に縛られながら、意識でも経済的にも「自立」した女性の姿を性差の観点も入れながら考察し明らかにした。

キーワード 離婚、無高百姓、初摺、按摩、性差

## はじめに

離婚は、今昔を問わず当事者・縁者にとって重大事であるが、特に女性にとってより困難な状況を生み出してきたし、また生み出しているといえよう。とりわけ身分制や家制度の拘束が厳しい近世社会にあつてはなおさらのことであつたと考えられる<sup>①</sup>。

ここで取り上げる事例は享和二年（一八〇二）の記録で、離婚した女性が子供を抱えながら家族を支えていた、いわゆる「シングルマザー」の実態である。この女性は「いで」という無高百姓の養女で、歳

は二四、五才、三才の子供（女）を育てていた。離婚といっても夫からの離縁ではなく、簪をいでが追い出したかたちの離縁である。いで②の生活の場合は摂津国西成郡下新庄村（大阪市東淀川区）であつたが、記録は同じ西成郡江口村の庄屋が残した村の記録『諸事留書帳』に記されている。それは近世社会の身分制と家制度に縛られながら、それを乗り越えて、意識でも経済的にも「自立」した女性の姿である。

ところで、近世の離婚については、法制史的観点と離婚そのものの実態解明、あるいは性差からくる男女間の差別（いわゆるジェンダー的観点）からの考察が一般的である。離婚成立の条件や規範、また幕

府法に違反した離婚に対する処罰からの考察では、武士や百姓・町人ともに夫からの一方的離縁ではなく、双方の話し合いと納得のうえでの熟談離婚が一般的であったこと、また妻からの離婚要求とその手段が縁切寺や村・町の寺院・神社あるいは名主（庄屋）宅への駆け込みによる場合が多かったことが指摘されている。<sup>(3)</sup>

佐藤孝之氏の研究によると、縁切寺といえ、鎌倉東慶寺や上野国新田郡徳川郷満徳寺が著名であるが、駆け込み先はこの二寺院だけではなく、どこにでもあるような村の寺院・神社、名主の屋敷などさまざまなであったことが確認されている。しかも駆け込みの目的が、妻の離婚手段であっただけでなく、結婚や保護・救済、争論・出入の調停、領主による処罰者の赦免などの要求であったり、領主に対する反対闘争の戦術、出火火元の処罰などの入寺であったことなども明らかにされている。<sup>(4)</sup>

離婚の事例研究も含めて、女性史の研究は一九七〇年代後半ごろから新たな胎動を始め、近世の女性の地位や生活の資を稼ぐ経済活動の実態も明らかにされてきたが、そこには研究視角や研究上の問題点もあった。それらは「伝統的な女性史のシェーマ」つまり「女性史は古代↓中世↓近世へと暗黒への道を辿り、近代がそこからの解放＝婦人解放運動の歴史と捉えられている」という視角である。<sup>(5)</sup>これゆえに、近世社会での女性の地位がそれほど低くなかったことを実証しながら、総括は女性の地位が低かったと評価されていたり、また女性の多様な経済活動の実証から地位の高さや女性の「自立」を指摘しながら、結局は近世は女性が「どん底」の時代であったという位置づけになっ

ていることなどという問題点が指摘されている。<sup>(6)</sup>

ここに指摘された問題点は、単純に言えば近代の女性の方が近世の女性よりも解放されているという観念の顛れとも言えるが、近世社会の女性の地位や経済活動、それに見合う「自立」の実態が研究「視角」のために正当な評価をされていないということである。その事態を打破するためにも、近世女性の実態を示す多くの事例の抽出作業はさらに必要であろう。さきの佐藤氏の研究も、離縁といえ、駆け込み寺という観念を見直させる研究であるが、結婚・離婚における女性の意識や地位に関する新たな例証でもある。

本稿もまた、近世女性の生活実態を明らかにするために、在方の離婚女性の実態を検証する。これまでの離婚に関する研究の多くは、離婚そのものの実態説明、事例紹介が中心で、離婚した女性の生活や稼ぎの実態についての研究はあまり見当たらない。さきの女性史の研究を一覧しても離婚女性の事例は多くないようである。<sup>(7)</sup>

筆者はもとより、女性史を専門とする者ではないが、離婚女性の稼ぎと生活に関する報告は最近の研究にもかかわらずそれほど多くないという指摘に触れて、この記録に残された女性「いで」の姿に接し、わずかではあるが、あえて離婚女性の稼ぎと生活の一例として紹介を試みた。現在でも「シングルマザー」が生き抜くためには、なおさまざまな経済的な、また社会制度・慣習による「障害」が指摘されている。それらが多分に「性差」から生じていることも大方の認めるところである。近世当時は今よりもなお困難な状況があったであろうから、その中で生きていた離婚女性の記録、それも経済的に自立した女性の

姿としてみると、日本での性差からくる種々の問題を考える一つの契機になると考える。<sup>①</sup>

## 一 無高百姓養女いでの家族と家業

### (一) いでの家族

江口村（大阪市東淀川区）庄屋孫右衛門は下新庄村東組の無高百姓庄三郎の養女いでの身辺を調査して代官所に差し出した。それが享和二年（一八〇二）一〇月四日付けの「乍恐口上書を以奉申上候」と題された記録である。

乍恐口上書を以奉申上候

江口村  
孫右衛門

一先月晦日内々御尋被為 成候下新庄村之儀者、当村与者二箇村も相隔候儀故巨細不奉存候付、早速同村江入込候ものを以聞合仕、猶私直々罷越聞糺候趣左ニ奉申上候、

下新庄村東組無高百姓  
庄三郎  
年六十三四

妻年七七八

とめ

娘二拾四五

で

天満樋上町辺より

幼少ニ而養女ニ来候由

孫年三歳

はる

四ヶ年以前天満より初摺ニ  
雇申候嘉兵衛与申もの入聲ニ  
取候節懷妊仕候処、其後離縁ニ  
およひ跡ニ而出生之由

右いて智嘉兵衛三ヶ年以前及離縁、養父庄三郎儀近年中風之気味

ニ而相煩行歩不自由ニ罷在候上、養母とめ老衰仕候趣、旁以困窮仕候、尤借金等も先達而用捨請配分仕候、既ニ居宅可売払之処、

一家共買戻し住居候得共、女之手業ニ而家内四人難暮候得者品々手稼等仕、勿論雇ひ可申与有之候へ者何方江茂罷越、其仕業之無撰

歟仕事・糸仕事又者按摩何ニ而も仕候而、其實錢を以養父母小児養育仕、両親とも陸間敷暮罷在候趣申聞候、愚昧之ものゝ行状、乍

恐於私も驚入神妙之儀与奉存候、且又右いて儀御町目附之方より聞合有之哉之趣承合候得共、此儀者いまた無御座候様子ニ相聞申

候、所之非人番折々村方ニ悪敷もの有之候得者長吏方江内通仕候儀ニ付、善事茂内通いたし度与存居候折柄ニ而、非人番より長吏江

申込候儀与相聞候、私直々承申候も、同村江入込候もの方承候茂右之通ニ御座候、尚又外々より茂御聞糺し御引合被為 成下度候、

以上、

享和二年十月四日

孫右衛門

篠山十兵衛様

御役所

記録によると、いではこの時点で離婚していた。記録の内実はいでの素行・身辺調査の報告書で、代官篠山十兵衛役所に差し出された。

記録には、いでの家族構成といでの履歴および生活の実態が詳細に記されている。また、いでの歟仕事・糸仕事・按摩などさまざまな稼ぎで一家を支えていたことも書き上げられている。

調査の指示は大坂町奉行から代官に対して出され、それに従って篠

山十兵衛が支配所の庄屋孫右衛門に指示していた。下新庄村の庄屋でもない孫右衛門がなぜに調査を命じられたかといえば、それは遠国奉行大坂町奉行が地域支配の一環として指名配置していた「懇意の百姓・町人」の一人であったからである。<sup>10)</sup>

孫右衛門への指示は、記録によれば「先月晦日」、九月三〇日にあった。日数にすれば三、四日の調査であるが、これは「内々御尋被為成候」とあるように、極秘の調査であった。下新庄村は江口村から南西の方向にあり、現在でも徒歩で一時間たらずの距離である。孫右衛門の調査は聞き込みから始まった。ただし孫右衛門は内密の調査であったこともあって、すぐさま下新庄村に入って調べることはできなかったようである。記録にもみられるように、自らの調査と下新庄村に出入りする者からの聞き出しによって、いどその家族の状況をまとめ、口上書として差し出した。

最初に、この記録からいだが置かれていた生活環境を確かめておきたい。

記事は戸主無高百姓庄三郎の家族調書として書き上げられている。この時点では、家族は夫庄三郎・妻とめ、養女いで、孫はるの四人であった。いでからみれば、養父は六三、四才、養母は七七、八才とかなりの高齢であった。さきにも触れたように、いでは二四、五才で、三才の子供を持つ母親であったが、離婚していた。

いでは、大坂天満樋上町辺り（大阪市北区）から幼少のころ庄三郎・とめの養女として貰われてきた。これ自体は大坂と近郊在方の日常的な交流を示す事例でもある。養女となった年次は不明であるが、

享和二年時点の年齢が二四、五才であることと、離婚直後に子供が生まれ三歳になっていることからすると、養女にきて二〇年近いと考えられる。仮に一六、七年前とすれば、その時点で、養父母はすでに四七、八歳と六一、二歳になっていたと思われる。記録によると、成人したいでは奉公人であった嘉兵衛を婿に迎え結婚したが、一年前後で離婚した。享和二年からは三年前に離婚したとあるから、いでが結婚した年齢は二一、二歳とみられ、子供は離婚後に出産したとある。孫右衛門が調査した時点では、三才の子供を育てる離婚女性で、現代風に言えば「シングルマザー」であった。

## （二）いで養父の家業

近世の村では、無高百姓と表示されながら実は商人・職人であったり、またさまざまな生業に就いていたり、百姓と表示されながら漁業者であったりすることは、すでに指摘されている。<sup>11)</sup> 無高百姓は多くの場合村内の大高持の小作人である事例が多い。表1は、村明細帳を用いて村高・反別と高持・無高（水呑）の構成を示している。<sup>12)</sup> いずれも相当数の無高・水呑を抱え、村方での農耕以外の稼ぎが必要であったことを示唆している。

いでの養父庄三郎も記録では無高百姓となっているが、入婿嘉兵衛が枌摺に雇った奉公人であったことから、家業は春米屋であったとみられる。村明細帳には表だって書き上げられない職種である。枌摺は、字義のとおり枌を摺り玄米にすることである。直接には枌の「玄米」化であるが、白米にする行程も含んでいたとみられる。雇い人もおり、

表1 摂津中嶋地域の村高・反別・家数・人数内訳

	江口村	下新庄村	十八条村	稗嶋村	海老江村
村高	石 553.805	石 742.890	石 307.385	石 1453.455	1363.617
反別	畝 6096.23	畝 (4228.06)	畝 3137.28	畝 12112.22	10068.04
家数	軒 108		軒 71	軒 685	軒 206
家持	84		43	186	104
無高	24		28	499	102
人数	人 494		人 375	人 3125	人 1109
男	254		177	1582	568
女	240		198	1543	541

備考：江口村は延享元年(1744)明細帳、下新庄村は宝暦4年(1754)明細帳、十八条村は元禄5年(1692)村差出帳、稗嶋村は天保15年(1844)明細帳、海老江村は享保9年(1724)明細帳による。

表2 小作年貢(小作料)一覧

	江口村	下新庄村	稗嶋村	海老江村
上々田	1.200～1.300		1.400～1.300	
上田	1.100～1.200	(1.500)	1.200～1.000	1.300～1.400
中田	0.900～1.000	(1.300)	1.100～0.900	1.100～1.200
下田	0.700～0.850	(1.100)	0.900～0.800	0.800～0.900
下々田				
上々畑	0.900～1.000			
上畑	0.800～0.900	(1.200)		
中畑	0.600～0.700	(1.000)		
下畑	0.500～0.600	(0.800)		
下々畑				

備考：史料は表1に同じ。下新庄村の( )は石盛。なお江口村ほか村々上田は1石5斗。

延、女ハ木綿・綿集仕候」とあり、その他の村々でも稼ぎの種類はほぼ一致しており、特別の差違はみられない。いずれも村方百姓の副業である。<sup>15)</sup>しかしこれは無高百姓にとっては必ずしも副業ではない。村明細帳にみられる無高・水呑、零細高持層の稼ぎ、生業と想定できる仕事は村内では小作であるが、これだけが生業ともいえない。表向きは無高百姓で、小作人・日雇人、実態は庄三郎のように農耕関係以外の生業を持つ無高百姓という状況は近世中期以降では珍しいことではない。西成郡地域では、同郡稗嶋村(大阪市西淀川区)の事例でも見られる。同村の記録天保一二年(一八四一)「家別職業書上帳」安政四年(一八五七)「村方模様書上帳」をみよう。まず「家別職業書上帳」をみると、家数と高持・無高の軒数と、無高の職種の内訳が記されている。<sup>16)</sup>

たんに無高百姓が生活の足しを得るような、余業といえるような稼ぎ

方ではなく、家業としての精米と米の小売も含めた春米屋(搗米屋)

であったといえよう。<sup>14)</sup>

一般的に農耕以外の稼ぎ・副業としては、農間余業としての縄・蒔、草履作りなどが知られる。村明細帳はこれらを記しているが、基本的には高持百姓と無高百姓の居住を前提とした稼ぎ・副業である。延享元年(一七四四)八月の江口村「明細帳」にも「耕作之間、男ハ縄・

一惣家数六百六拾九軒

内

高持 百七拾八軒

但、内壺石以下五拾七軒

無高 四百九拾壺軒

内

一手之百姓

百三拾軒



干物青物商人 百九拾三軒  
 鰻・鰯・田螺取 貳百六軒  
 居職人 四拾軒  
 医師 四人  
 自身番 貳軒  
 非人番 壹人

右之通相改相違無御座候、以上、

天保十二巳年二月

右村

年寄

惣右衛門（印）

八兵衛（印）

仁兵衛（印）

築山茂左衛門様

御役所

高持よりはるかに多い無高百姓の職種は、一手の百姓・干物青物商人のほか鰻・鰯・田螺取などの川漁師、居職人であった。医師・自身番・非人番は明細帳にも記される職種であるが、近世の村では無高の範疇にあったことが確かめられる。ちなみに、これらの職種は同村の天保一五年の明細帳には記されていない。表示は高持と無高の人数だけである。

この記録で、高持よりも無高が多く、高持のうちでも一石以下が五

七軒を占めていること、さらに無高四九一軒の内訳が「一手之百姓」と干物青物商人、川漁師と職人他に分けられている点に注目しておきたい。このうち「一手之百姓」一三〇軒は無高のうちで小作を専業とする者を意味している。ただこれらの軒数と人数の合計は五七六軒で、無高総数を上回るので、重複が推測されるが、代官所（領主）への書き上げでは無高百姓、実際の専業は商人・職人また漁師であったことは明かである。

次に「村方模様書上帳」では、村高と家数・人数の総数七七〇軒・三五八四人の内訳が「農人」九三〇人と「商人」七四五人に分けられている。<sup>17</sup> これからも村内での商人の存在は代官・百姓双方とも自明であったとみてよい。百姓・村側はその理由として「当村儀者前条之通他村と者多人数ニ御座候二付、農業透問之節手覚之営仕候」と書き上げている。その手覚えの営みによる産物は木綿一五三〇疋と田螺実五七石であった。これらも含めて、「商人之儀者土地出産之米・麦・木綿・実綿・干物・海魚・川魚・鷺卵等、日々大坂へ売買ニ罷出渡世仕候」とあり、村の産物はすべて村の商人が大坂へ運んでいた。農人は農耕、商人は大坂への産物販売での渡世であった。天保一五年の明細帳では、実態は商人であっても表面上は農間稼ぎと言わざるを得なかったのである。これは近世の「百姓」が農耕専一の民として位置づけられていたことによっている。<sup>18</sup>

同様の表現は「髪結職并煮売渡世之者書上帳」でも確かめられる。稗嶋村には髪結五人と煮売屋九人もいたが、これらも基本的には農業透き間の渡世であった。「右之者共小作百姓ニ而御座候而農業手透ヲ考、

余業として髪結いたし居候、床与申候而者一切無御座候」とあり、髪結床と表示されているが、小作百姓の余業であることを強調している。<sup>19)</sup> これも代官所への書き上げであるから、あくまでも農業を第一に余業としての髪結稼ぎであることを強調せざるをえなかったのである。

慶応三年の「質屋其外余業之者書上帳」では、さらに詳しく余業の職種が書き上げられている。髪結・煮売屋のほか質屋・湯屋・樽屋職・大工・舟大工・左官、搗米屋・日用物小売商い・酒醬油小売・鰻鮎屋・豆腐屋・菓物類小売など、商人・職人・小売商人すべてがいた。<sup>20)</sup>

これらの事実は、村方に玄米（粳）を日々飯米用に精米する搗米屋が存在し、村内に居住する百姓および行商人、小売商人、職人らを相手にして生活が成り立つ環境があった。在方でもすでに日常的に白米を食する生活習慣が出来上がっていたことを示している。<sup>21)</sup> いでの養父母も無高百姓であったが、家業は農耕以外の生業、搗米屋であり、実態は職人ないし小商人であった。

## 二 いでの稼ぎと職種

### （一）職種―鈎仕事・糸仕事・按摩

近世の無高百姓は、摂津西成郡の村々だけでなくさまざまな生業で生計を立てていた。いでの養父母も表向きは無高であったが、糶摺、搗米屋で生計を立てる職商人であった。いでのとって緊急で重要な事態は養母の高齢と老衰、養父の中風（痛風）と歩行困難のため、家業の継続が不可能となっており、そのため家計が困窮していたことであ

る。この事態は、いだが嘉兵衛と離婚して家職を維持する働き手を失ったことで増幅されたと考えられ、「三年前」の離婚直後から始まり、進行していたと推測される。

この打開のためにいでは働きに出て家族を養う必要があった。記録では、借金のために居宅も売り払わざるをえないような状況に追い込まれていた。孫右衛門の調査時には、借金は用捨を請け、居宅も買い戻して家族で居住していた。借金の解消、居宅の買い戻し、および家族四人の扶養にはいでの稼ぎが大きな支えとなっていたとみてよい。

もとよりいでは糶摺のような力仕事は困難であったとみえて、「品々手稼等」で収入を得ていた。いでは、「雇ひ可申与有之候へ者、何方江茂罷越、其仕業之無撰」とあるように、雇いたいという求めがあればどこへでも出向き、鈎仕事・糸仕事から按摩までこなし、形振り構わない稼ぎ方で家計を支えていたのである。稼ぎ先は、「当村与者二箇村も相隔候儀故巨細不奉存候付、早速同村江入込候ものを以聞合仕」という記事から下新庄村外に出ることもあったと推測できるが、ほとんどの場合は下新庄村内であったとみられる。孫右衛門の調査記録は、享和二年当時でも在方に農業以外の職種で日銭を稼ぐ労働環境ができあがっていたことを示す記録でもあろう。<sup>22)</sup>

いでは女性ゆえに肉体的な面からも家業を継げず、小作人として農耕に専念することもできず、しかも三歳の子供を抱え、養父母を養うには鈎仕事・糸仕事・按摩などで生計を立てるほかなかったのである。しかしその職種と稼ぎは稗嶋村の事例からみれば、必ずしも特異な稼ぎ方ではなかった。摂津国豊嶋郡原田村（大阪府豊中市）に享保一四

年（一七二九）の「女給銀定」があり、六種類の職種と賃銀を確かめることができる。

この記録は、享和二年より以前に原田村で取り決められた女性の給銀で、当時一般化していた女性の雇用賃銀の標準額である。

#### 相定覚

一布 織式拾五匁 壹年究

一次 式拾目

単物 染賃壹匁

布子 同 壹匁三分

一草乙女賃銀七分

一真時方田草取賃 男四分 女三分

一屋根葺賃 壹匁

一綿打賃 百目二付七文

右之通村中庄屋・年寄・惣百姓立会堅相究申ス相談之上者、聊以乱有間敷物也、

原田村

享保十四年酉二月八日

原田村は下新庄村・江口村地域からは神崎川を隔てて北西に位置している。職種をみると、布織・接ぎ当て（洗い張り）、染め賃、草乙女（早乙女）、草取、屋根葺、綿打の享保一四年時点の賃銀が記されている。

農作業関係の職種は早乙女・田草取である。「草乙女」とは、田植え時に手伝いとして雇い入れられる女性のことである。屋根葺は大

工・屋根屋の手伝い、綿打は収穫した綿をほぐし、種とより分ける作業、また布の織は麻布の機織、「次」は洗い張りである。

これらは明細帳に記された奉公人給銀や農間稼ぎの手間賃ではなく、また明細帳には記されない職種と賃銀である。いわば女性の日雇い賃銀の取り決めである。このような給銀が定められる背景には、多くの女性が賃銀稼ぎに働き、またそれを受け入れる雇用環境があったことを意味している<sup>(24)</sup>。

いでの歟仕事・糸仕事はこれらに類する仕事であったといえよう。

歟仕事は、一般的には田畑での歟を用いた農作業、その手伝いとみられる。田起し、畔作り、苗代作り、田植え、夏の除草、畑の畝作り、麦蒔き、除草作業など短期間に多くの人手が必要な時期に、その手伝いで日銭を稼ぐことであったとみられる。原田村の記録は享保一四年時点の給銀を定めているから、そのころから女性を対象とした季節労働雇用ができあがっていたといえよう。

次にいでの糸仕事である。糸仕事とは一般的には紡いだ糸を整理する仕事であり、専門的な知識、技術はそれほど必要はない。機織りであれば、その機の用い方、織り方にそれなりの熟練がいるが、それほどの込み入った仕事ではなく、機織りの補助作業的な仕事であろう。それゆえにこそ、二三、四才のいでも勤まったと考えられる。

古代以来民間に普及していた糸は麻糸（苧麻糸）であり、衣服もそれで織られた布であったが、近世には木綿が普及し、綿織物が当たり前となった。摂津・河内・和泉が木綿の一大産地であったことから、村々の明細帳にも女性の農間稼ぎは糸繰り・綿織と記されるようになる



っている。

糸仕事に似た仕事に針仕事があるが、これは着物の仕立てや繕い仕事である。これには反物から着物に仕上げるために相当の技術がいる。また着物の繕い仕事にしても針の使い方にもそれなりの熟練がいるであろう。さきの原田村の記録では、糸仕事に類する職種は明らかではないが、「次」は針仕事を指している。これに対し綿打ちは種のより分けて単純作業である。糸仕事は単純作業という意味では綿打ちに近い仕事といえよう。

いでの糸仕事は木綿糸の整理とみられ、い度が針仕事の技能を備えていなかったために、糸仕事という針仕事・機織りに付随する手伝いの作業に従事していたとみたほうがよい。

いでの稼ぎのなかで、興味を引かれる職種は農作業の手伝いや在方の副業的な職種とは性格を異にする按摩である。按摩とは、辞典類には「からだをもんだいり、たたいたりして患部を治療すること。またそれを業とする人」とある。また近世にはこれを生業とする人が盲目の人が多かったので盲人をさすともある（『国語大辞典』小学館）。

『守貞謄稿』によると、近世の按摩には「振り按摩」「小児の按摩」「足力按摩」などがあつたが、京阪には店を構えて客を迎える足力按摩はなかったと記している。振り按摩は得意先を持たず、路上を巡つて、どこでも求めに応じて按摩をすること、普通の按摩は上下揉みで四八文、上のみ、下のみ場合はその半額であつたと記している。また小児の按摩は二四文と普通按摩の半額であつた<sup>(25)</sup>と記している。

いずれにしろ、按摩は患部の治療技術の一つとして知られていた。

これにも「つば」の探り方や揉み方に一定の習熟期間が必要であるから、いでの年齢で、また離婚した後の年数を考慮すれば、按摩の技術を習得していなかったと見た方が妥当であろう。それゆえ、いでの按摩は、現在でいえば単純な筋肉マッサージに類する揉み・たたきと考えられる。

いでは雇う者があればどこへでも行き、職種を撰ばず何であろうと構わず働いた。按摩はその典型的な「仕業」であつたといえよう。孫右衛門も記すように、いでは「神妙之儀」と言わざるをえない健気な働き者であつた。無高百姓本来の仕事といえば、近世の在方では、稗島村の無高百姓に見られる「一手之百姓」と表示される小作人としての働き方である。ある意味ではきわめて当たり前の稼ぎ方であるが、いでは小作人とはならなかった。それも養父母の生業と関係があらう。

## (二) 稼ぎ高

いでは奉公人嘉兵衛を簪に娶つたが、それは本人も養父母も家業の継続を意識した結婚であつたといえよう。しかし離縁によって男手を失い、家業の継続が困難となり、い度が一家を支える役目を担うことになった。いでは女の身でこなせる仕事はすべて受け、「仕業之無撰」く働いた。それらが歛仕事・糸仕事・按摩などであつた。

果たして、いでは家族の生活を支えることができたのが問題である。まずは享和二年（一八〇二）ごろのいでの稼ぎ高を推測する必要があるが、歛仕事・糸仕事・按摩などの職種は明細帳には記載がない。そこで、これらの職種の賃金を宝永六年（一七〇九）大坂町方の「大

工日雇賃銀定<sup>26</sup>」、前出の原田村での「女給銀定」、天保期ごろの按摩料金の記録<sup>27</sup>を参考に推測しておきたい。

大坂市中の土工・日雇の賃銀は、宝永六年の記録では一日当たり大工が三匁三分から三匁五分、左官と屋根葺きが二匁七分から二匁九分、日用人（日雇い人）が一匁一分から七分であった。また天保から慶応（一八三〇—一八六八）にかけても、大工が飯代込みで四匁三分、昼食を提供されるときは一匁二分が差し引かれたから、公定賃銀に大きな変動はなかった。<sup>28</sup>左官・屋根葺き・日用人の賃銀も同様とみてよいから、いでの職種からみれば、稼ぎ高の目安は日用人の賃銀一匁一分から一匁七分であろう。

大工手伝いの日用人の仕事は、それほど熟練を必要としない単純労働とみてもよいから、この賃銀は他の職種の日用人の標準的な賃銀を示している。この点は、享保一四年の「女給銀定」でも想定できる。これは原田村で取り決められた女給銀の定記録で、女性の日雇い賃銀の取り決めである。

これを参考にすると、いでの鎌作業と関連する稼ぎは早乙女・田草取である。前出の記録では、早乙女の賃銀は一日七分、また田の草取では女性は「真時」（正午）から半日の賃銀が三分とされた。また屋根葺は大工・屋根屋の手伝いと考えられ、一日一匁で、さきの大坂三郷の大工・日雇の賃銀にほぼ相当する。これも単純労働とみなされる日雇人の賃銀標準とみてよい。

いでの鎌仕事の賃銀は、「女給銀」定めの早乙女と田の草取りに類していたとみられる。農作業からすれば、田の草取も鎌仕事も手伝い

仕事と判断されるから、享和二年は時期的にはやや遅れるが、大工賃銀の場合も宝永年間でも天保年間でも変化はなかったので、賃銀は七分から三分の間であったと推測される。

給銀定のなかで、同じく単純労働とみられるのは綿打である。綿打は作業量によって決められ、重さ百匁単位に七文の賃銀である。これも綿の収穫期に対応した季節労働であったとみてよい。

また糸仕事は「女給銀」定めの「布」「次」が目安となるが、布の織は麻布の機織、「次」は洗い張りである。機織も洗い張りもそれなりの技術と経験を要する。そのため機織は一年間の賃銀二五匁と、布の種類による手間賃として決められている。また「次」は洗い張りを前提とした賃銀で、一着二〇匁、洗い張りが一着一匁から一匁三分となっていたとみられる。いずれも単純な糸の整理とは違った熟練を要するので、かなり高額な設定となっていた。これらを差し引いて考えれば、糸仕事は、さきの農作業の手伝いと同一一日三分から七分が妥当であろう。

早乙女や田草取、綿打などはいずれも年間の農耕循環と関連しているとみられ、雇用時期は苗代から田植えの時期、麦刈とその後の田起し、田の草取り、稲刈りと収穫作業、麦時き・麦踏みなどの時期とみられる。綿もまた稲作の時期とほぼ相応している。いずれも限定された期間で、毎日ではないとみられるから、収入は不安定であったといえよう。

いでは女性で、三歳の子供を抱え、老齢で病気の養父母を養っていた。小作人ではなかったから、生活費はすべて現銀収入で賄う必要が

あった。絶対的な不足は否めない。農作業の手伝い仕事の不安定さを補う稼ぎが按摩であつたようである。<sup>(29)</sup>これは季節的な期間限定はなかったから、一日一日の生活のために日銭を稼ぐには好都合であつたといえよう。

近世では、さきにみたように、小児按摩で二四文、普通按摩四八文が相場であつた。いでの稼ぎは、普通按摩であつたとすれば一回四八文であるから、最低二五日働いたとしても一二〇〇文、銀にすると約一八匁（一匁＝六七文換算）になる。もちろん素人按摩であれば按摩賃はやや低く扱われたとしても不思議ではないから、稼ぎはこの半額より低かつたであろう。

按摩は求めに対応すれば、一ヶ月安定した稼ぎとなる。一ヶ月九匁から一八匁までの間で稼ぎがあつたとみられる。これに季節的な農耕の補助作業や手伝い仕事からの臨時的な収入を加味すると、一ヶ月当たりの総額は不明であるが、いでは四人がなんとか生活できる賃金を稼いでいたとみてよいであろう。<sup>(30)</sup>

### 三 いでの行状調査の背景

在方において、いでの従事した職種はいずれも日雇い、手伝い仕事、臨時的な補助仕事を中心であるが、大きくは在方に特有の農作業の手伝いと農間稼ぎに類する仕事を中心であつた。その職種は周囲に何ら不審感を与えるような働き方ではない。孫右衛門が「愚昧之ものゝ行状、乍恐於私も驚入神妙之儀与奉存候」ともあるように、他の者から

はすこし無謀な稼ぎ方と見られていたかもしれないが、いでは誰の援助も得ずに、老養父母を養い、三才の子供を養育する、遅しく「自立」した女性の姿そのものである。それは経済的に余裕のある庄屋や町方商家の女性が自ら計画をして旅に出たり、家計を切り盛りしたり、茶道や生花などに精魂を傾けるような意味合いでの娯楽・文化・経済活動とは異なつた「自立」的な活動である。<sup>(31)</sup>

いでは孫右衛門に「神妙之儀」と言われるような、必至に生活を支える女性であつた。そのいでがなぜに身辺調査されたのかが次の問題である。その手掛かりは、孫右衛門の口上書に留められた「所之非人番折々村方ニ悪敷もの有之候得者長吏方江内通仕候儀ニ付、善事茂内通いたし度与存居候折柄ニ而、非人番より長吏江申込候儀与相聞候」とある部分である。

孫右衛門の記録に示唆されているように、この事態は当時在方（また町方）の情報収集・調査が二つの機構で行われていたことに起因している。一つは、この記録に示された非人番―長吏―与力（町目付）の経路によつて大坂町奉行へ情報が上がる機構であり、基本的な機構である。もう一つが、在方・町方の有力な庄屋・町年寄らを「懇意の百姓・町人」に認定して情報を収集する機構である。いずれも大坂町奉行に情報が集中するが、同じ情報を別々に、また客観的に収集・判断することができる機構である。<sup>(32)</sup>

この調査・探索体制に従つて、「所之非人番」は担当の在方地域で、不審な行動や怪しげな振る舞いをする「悪敷もの」を見つけて、探索の元締である長吏に知らせることが任務であつた。その非人番の目に

「悪敷もの」として留まったのがいいであつたといえよう。

いでの行状で容易に想起できる不審な行動形態は按摩稼ぎであろう。さきに見たように、歛仕事・糸仕事のような在方に特有の稼ぎ方からみれば、按摩だけが特異であつた。それに加えて、いでの職種と場所を選ばない働き方、また女性の按摩稼ぎが周囲の不審感を増幅していたからであろう。この不審感（あるいは嫌悪感）は現在でも同様で、あまり良い印象を抱かせないように、当時は身分制と性差から来る制約がより大きかったため、増幅されたと考えられる。

これには近世の社会的背景もまた前提になっている。当時按摩には特別の意味合いが含まれるようになっていた。いくつかの辞典類をみると、按摩には、「あんまを取りましよう」などといって部屋にくるところから「宿駅などの私娼をいう隠語」（『国語大辞典 小学館』）として用いられていたことである。按摩は多くの場合他人の家に入り込んで行う仕事であり、当時の隠語に用いられた悪い見方からすれば、いでは「私娼」、つまり売春行為をしているのではないかと見られていたといえよう。

『守貞謄稿』には、京阪の振り按摩は「夜陰のみ巡り」とあるように、<sup>(33)</sup>いだが按摩にでる場合、夜に呼ばれることも多かったとみられる。二四、五才の女性が夜中に歩き回る情景は芳しくない事態である。このいでの行状については、孫右衛門の口上書に、「右いて儀御町目附の方より聞合有之哉之趣承合候得共、此儀者いまた無御座候様子二相聞申候」とあるように、孫右衛門は「町目附の方」からの聞き合わせがあるのではないかという情報を得ていた。孫右衛門が調査報告書を

差し出した時点ではまだなかったが、いでの行状調査について大坂町奉行・与力から何らかの動きがあつたことを窺わせる。

いでの調査は非人番の情報を基に「懇意の百姓」孫右衛門に実態調査を命じた事例である。所の非人番が村方に行状の悪い者や不審者の動向を日頃から監視し情報収集をして届けていた。

町目付とは、大坂町奉行所与力・同心の役職で、天明七年（一七八七）八月に新規に設置された。<sup>(34)</sup>「目付役勤書」は与力・同心の勤務状況や諸吟味で依怙鼻肩のないように、日に一度は当番所（奉行所受付）・諸役所を見回り、「善惡一鉢之行常（状）」を監視する役目であつたと記している。特に訴訟公事の吟味役所の見回りや風聞の調査は重要であつた。

一毎月兩三度程宛日ヲ不極吟味役所へ罷越、吟味方役人吟味之様子及見聞、尤吟味之取扱ニ者携不申、筋合難分儀有之節者掛り役人江相尋、其品相分り候ハ、承置、難相分儀ハ書付ヲ以都度々申上、勿論如何之風聞等有之儀者内密ニ而申上事、

但、本文之通内密風聞等聞合をも仕候付、四ヶ所長吏小頭共之内屯人、右聞合方ニ兼而召仕候事、

目付は与力・同心の職務の監視だけでなく、何らかの風聞があればその根拠・状況を内密に調査する役目も担当していた。その調査のために、四ヶ所長吏・小頭のうちから一人を「聞合方」つまり調査担当者に指名していた。これらは吟味役所に限られた勤書ではあるが、与力には内密の調査に従事する者もあり、また四ヶ所長吏とは大坂市中および在方の非人の統率の頭であつたから、役所内外、町方・在方等



においても、実際に長吏・小頭のもとで当該地の非人番が情報収集にあたっていたとみられる。<sup>35)</sup>

これが孫右衛門の調査報告書にみられる「所之非人番」であり、「長吏江内通仕候儀」という在方から大坂町奉行所への情報伝達経路であった。いでの場合も、形振り構わない稼ぎ方が在方での風聞や不審な行状の因となり、非人番が長吏に内通したと考えられる。それも、いでの「私娼」的行動にかかわる風聞と推測される。

それを受けて目付方与力が大坂町奉行に進言し、町奉行から代官、代官から孫右衛門への調査指示となったといえよう。ただ、風聞の事実関係やその善悪については、非人番が長吏からよく思われようとして、善行であっても悪く伝える傾向が強かったので、孫右衛門を通じて事実確認の調査指示となったと考えられる。

孫右衛門が直々に調査し、また下新庄村に出入りする者からの情報を総合した結果、いでは「女之手業ニ而家内四人」を養い、三才の子供を養育し、両親とも仲睦まじく暮らしていた健気な女性であった。行状には何も問題はなく、たくましい離婚女性の生き方が明かとなった。

その健気な働き者の女性い度が調査の対象となった起因・背景には、い度が職種に関係なく、どこにでも出向いて働いていたことと、近世が身分制社会であり、それが男女を問わず稼ぎや暮らしの区別（差別）となっていたことに主因があったといえよう。特に職種では、いでの按摩稼ぎが起因であったとみられる。それも按摩に対する近世社会の隠語的な用い方に見られる社会意識にあったようで、現代に通ず

る偏見の一端でもある。また女性の働き方・稼ぎ方に対する偏見の背景が、男女の性差（ジェンダー）からの人格的区分・束縛を支配の一手段とした近世権力の実態にあった。

## おわりに

いでの暮らしぶりは、経済的な基盤を自ら作り出して、ある意味では近世社会の種々の束縛をはねのける「自立した」一人の女性の姿を示している。「既ニ居宅可売払之処、一家共買戻し住居候得共」ともあるように、養父母の老衰と病気によってもたらされた困窮の生活を「自力」で回復し、自らの稼ぎで支えていた。「女之手業ニ而家内四人難暮候得者品々手稼等仕」という困窮の状況を克服していたのである。

近世の百姓・村の研究は支配の基底を成す百姓の村という視点からの構造論的、身分的探求が主流であり、政治支配・被支配的な側面からの追求であった。百姓と村を構成する不可欠の部分が女性であるが、この女性の側からの研究が不十分であったことは否定できない。また研究があったとしても、支配・隷属の側面に偏っていたことも事実であろう。この点はさきにみた研究史への批判的視角にもみえるところである。

女性史に限らず近世社会の「一面的な」見方からの研究には、筆者も疑問を抱いてきた。特に百姓女性の稼ぎと暮らし、生き方については、史料が存在しないわけではないのに、意識するしないにかかわら



ず、「優先的な」研究の対象からは避けられてきた事実も否定できない。

一九八〇年代半ば以降近世の女性史研究は、何よりも実態の解明とその積み重ねが必要であると指摘され、その方向での研究が蓄積されてきているが、なお女性の生活実態を明らかにする作業が必要であろう。それは、これからの性差の是正と解消を目指すためにも、また性差の本来あるべき正當な「かたち」を考えるためにも必要な作業であろう。

# 〔注〕

(1) 生活実態や結婚・離婚の問題からすれば、近世女性史研究会編『江戸時代の女性たち』（吉川弘文館、一九九〇）所収の諸論文があるが、特に小川幸代「浅田家の女性たち」、増田淑美「吉野みちの生涯―その手紙を通して」、また妻鹿淳子「江戸前中期の女奉公人の婚姻について」（女性史総合研究会編『女子史学』第二号、一九九二）などもある。いずれも離婚の原因を考察してはいるが、その後の状況について述べている研究は少ない。

(2) 拙編著『摂州西成郡江口村方記録』（大阪市史史料第六十四輯、二〇〇四）所収。なお下新庄村は村高七四二石八斗九升で、徳川氏直轄領である。元禄一三年（一六九）に新庄村が分村し成立した。さらに享保一〇年に東組（二四二石一斗一升一合・西組（五〇〇石七斗九升）に区分され二ヶ村となり、明治維新に至る（『西成郡史』大正四年）。本稿で使用する下新庄村関係の史料は主に田中健一氏所蔵江口乃里文書の記録である。

(3) 大竹秀男『「家」と女性の歴史』（弘文堂法学選書四）、最近では佐藤孝之『駆込寺と村社会』（吉川弘文館、二〇〇六）。『国史大辞典』の「離婚」「離縁」の項目（高木侃執筆）。しかし、離婚後の女性の生活

実態についての事例は少ない。

(4) 佐藤孝之『駆込寺と村社会』参照。

(5) 西尾和美・藤村淳子・京楽真帆子・谷口美樹・横田則子・乾智代「女性史研究の課題―脇田晴子・林玲子・永原和子編『日本女性史』を読んで―」（『日本史研究』三三四号、一九九〇年）。批判者・被批判者いずれも一九九〇年ごろから女性史に取り組まれている人たちである。

(6) これは、女性史の問題を運動論として限定しすぎることから生み出されている部分でもある。かつての民衆史・運動史の隆盛と一九九〇年代以降の低迷の要因を検討した須田努氏の指摘は、女性史の分野においても首肯できることが多い。独特の「シエーマ」に縛られすぎないことであろう。同氏「民衆史・運動史の解体？」（『歴史評論』六六七号、二〇〇五年）。

(7) 近世史の研究論文集でも、女性史関連の一編が含まれるようになっていく。たとえば歴史学研究会・日本史研究会編『日本史講座』第六巻などである。そうであってもさらに多くの個別事例の蓄積が求められていることは、現状でも変わらないようである。

(8) 旅、娯楽、結婚・離婚、家事などにおける女性の主体的な行動の実態は、当人の日記・書状類の記録から明らかになってきているが、自ら稼いで生活を立てていく実情を明らかにする研究は多くない。ここ数年の研究史をみても絶対数に比べ、稼ぎの実態を探る研究は少ない。

『経済史文献解題』（日本経済史研究所編）および『史学雑誌』の「回顧と展望」の該当部分、特に一九九〇年以降参照。また『女性史学』（女性史総合研究会）でも同様であり、藪田貫「近世社会と性差」（歴史学研究会・日本史研究会編『日本史講座』第六巻、東京大学出版会、二〇〇五年）および同氏『女性史としての近世』（校倉書房、二〇〇四）でも同じ傾向がみられる。

(9) 「性差」ということが、単に男女の肉体的差違ではなく、歴史的・文化的・社会的に形成されるそれとするならば、その実態の解明には女性の立場から述べられるだけの問題ではない。「自立」や地位の問題は男性の問題でもあるからである。その意味で藪田貫氏の研究活動は

貴重である。前掲同氏「近世社会と性差」ほか参照。

- (10) 懇意の百姓・町人は大坂町奉行が管轄地域内の情報収集を目的に指名配置したと考えられる。これは少なくとも宝暦六年(二七五)ごろには存在していたことが確かめられるが、懇意の百姓の一人に江口村庄屋も指名されている。徳川政権が地域支配の基軸として直轄都市に置いた遠国奉行による地域支配の特色を示す事例といえよう。孫右衛門の調査は、大坂町奉行とその支配国内の代官支配所との支配行政領域管轄と権限にかかわる事例でもある。渡邊忠司『大坂町奉行と支配所・支配国』(東方出版、二〇〇五) 参照。

- (11) これは、摂津国西成郡裨嶋村(大阪市西淀川区)の事例にみられるように、大坂三郷と町続在領また近郊村落との位置関係から、青物・魚などの生鮮食料品の供給や尿処理など、それらに伴う人的交流(行商人、年季奉公人・下人の受給関係など)によっている。『新修大阪市史』第三卷第三章第八節、同第四卷第二章第五節、および岡田光代編『史料紹介 摂津国西成郡裨嶋村天保一五年「明細帳」、他』(『大阪府立大学歴史研究』第三三号、一九九五) 参照。

- (12) 網野善彦『日本社会の歴史』下(岩波新書、一九九七)。

- (13) 江口村は江口乃里文書、十八条村は漢井家文書、六反村は小枝家文書、海老江村は羽間家文書、裨嶋村は前掲岡田氏編史料紹介による。

- (14) 村方の余業が専業として成り立つには、前提として村内での分業化が進んでいなければならないが、郡裨嶋村では村内に商人・職人が表面きは無高でありながら、それぞれの生業を営んで居住していた。表面上は無高、実質は商人・職人という事態は大坂近郊の村々ではきわめて一般的なことであったとみられる。前掲岡田氏の史料紹介によれば、慶応三年の時点で搗米屋一〇軒があった。八九頁。裨嶋村の分析は拙著『近世社会と百姓成立―構造論的研究―』(思文閣出版、二〇〇七)でも行った。

- (15) 註(13)の村々明細帳参照。

- (16) 前掲岡田氏編史料紹介、八三頁参照。記録には、天保一二年時点における一石以下の高持百姓数が明記されていることはその現れであろう。

- (17) 前同、八七頁参照。

- (18) 兵農分離後の村には、基本的には年貢米を生産する農耕専一の百姓だけが居住する。それが検地の目的であった。「小農自立」という政策基調の指摘は豊臣政権以後の近世初期権力の方向性を確認したことを意味している。安良城盛昭『幕藩体制社会の成立と構造』(御茶の水書房、一九五九)以後の研究史に示されている。また刀狩令や『本佐録』には、近世領主の求めた百姓像が示されている。前掲拙著『近世社会と百姓成立』参照。

- (19) 岡田前掲史料紹介、八四頁。天保一四年「髪結職并煮売渡世之者書上帳」。

- (20) これらがすべて明細帳では無高百姓と表示されている。さまざまの職業をもち、商人・職人でありながら領主向けの表記が「無高百姓」あるいは「水吞百姓」となっている。前掲岡田編史料紹介。

- (21) 畑場八ヶ村のように、大坂三郷の町続在領はもちろんのこと、青物をはじめとする種々の生鮮食料品の大坂への供給は在方からの行商人らが担っていた。前掲岡田編史料紹介、および『守貞謾稿』の生業の章、『新修大阪市史』第三卷第四章第六節参照。

- (22) 綿作や菜種作など商業的農業の展開がその環境づくりに大きな影響を与えていたとみられる。多くの人手を必要とする綿摘み、菜種を絞る油にする行程でも多くの人手が必要であった。『新修大阪市史』第四卷第二章の各節参照。

- (23) 『新修豊中市史』古文書・古記録編(豊中市、二〇〇一)。

- (24) この事例は現在の豊中地域の女性の賃銀定であるが、必ずしも大坂近郊地域ではない。江口村・下新庄村あるいは裨嶋村からみれば、大坂からはさらに離れ、農業中心の村落地域である。この給銀定は、そのような地域であっても標準給銀を取り決めなければならないほど働く女性が多かったことを示している。享保一四年以後、この状況がさらに進展していたことは、ここであげた裨嶋村の状況のみをみただけでも容易に想定できる。いでもまたその一人であった。

- (25) 『近世風俗志(守貞謾稿)』(一)(岩波文庫、巻之六(生業下)、二

七四頁。

(26) 宝永六年（一七〇九）「大工日雇賃銀定」（『大阪編年史』第七卷）。

(27) 前掲『近世風俗志』（一）、巻之六（生業下）、二七四頁。

(28) 前掲『近世風俗志』（一）。「大坂大工雇賃定あり、一日銀四匁三分なり、もし家を造るの主より三時の食を与ふ時は一匁二分を減じ三匁一分を与ふなり、この一匁二分を飯料と云ふなり」とある。二三八頁。

(29) 『地方凡例録』（近藤出版社版）下巻には、高持百姓が再生産と自立自営の可能な耕作規模、およびその採算に関する試算が載せられている。同書「作徳凡勘定之事」、五五―六二頁。その耕作反別は五反五畝である。もちろんこれは表作と裏作を前提にした試算である。これに従えば、例えば無高・水吞層が小作料だけで生活していたとすると、平均五人家族（いでは四人だが、夫がいれば五人）で、少なくとも米だけであれば三石から五石は必要となるから、納入小作料と合わせればその耕作反別は最大で延べ五反、実質の収穫量は八石程度となる。裏作の麦を主食と考えれば、小作料を考慮しても実質小作反別は二反から三反で賄えるとみられる。いでは小作人ではなかったから、これに相当する金額を単純に米一石一両、六〇匁で換算すれば、その年額は三石で一八〇匁、五石で三〇〇匁である。一ヶ月に直せば一五匁から二五匁である。

(30) 村明細帳には、一ヶ年の下人給銀・奉公人の賃銀が記される。これらは男女それぞれに記され、男女間に明確な違いが付けられている。仕事の内容にもよるが、稗嶋村では、男の下人で一五〇匁から最高二五〇匁、女で五〇匁から一〇〇匁が賃金の基準であった。これは稗嶋村に限らず、摂津・河内地域の村々では一般的であった。もしもいので下人奉公していたとすれば、一年に最高で一〇〇匁の賃金を得ていたことを想定させる。しかしいでは子供もおり、奉公にでる時間的余裕はなく、小作人でも下人でもなかった。前掲岡田光代編史料紹介、天保一五年の稗嶋村明細帳による。また江口乃里文書・小枝家文書・羽間家文書などの明細帳による。

(31) 藪田貫前掲「近世社会と性差」（『日本史講座』第六巻）および『女性

史としての近世』などに見られる庄屋・大商人の女房や娘の取り上げ方である。

(32) 内密の調査機関とは、一般に与力―長吏―非人・手下という系統である。神戸市立博物館所蔵「三ヶ条大下書」（『大坂町奉行所与力・同心勤方記録』大阪市史史料第四十三輯所収）、『大坂町奉行所旧記』上下（大阪市史史料第四十一・四十二輯）など参照。

(33) 前掲『近世風俗志（守貞謄稿）』（一）、二七四頁。

(34) 『大坂町奉行所旧記』上（大阪市史史料第四十一輯）、一三〇頁。

(35) 四ヶ所については、内田九州男「大坂四ヶ所の組織と収入」（『ヒストリア』一一五号、一九八七）、「新修大阪市史」第三巻第四章第二節「四ヶ所の形成と組織」参照。

（わたなべ ただし 歴史学部）

二〇一〇年十月十二日受理